

その一瞬にかける武士道精神



私は、高校・大学と7年間柔道を習いました。大学の授業では、還暦近い教授が指導に当たっていましたが、何度真剣に挑んでも、まったく歯が立たなかったことを思い出します。その教授は、学生の間で「達人」と呼ばれるだけでなく、「仙人」とも呼ばれ、日々稽古を繰り返して、武道家としての技を極めていました。この経験から、私は、精神を鍛え人格を磨くことや礼を重んじる態度を身に付けることなど、人間形成を目的とした「道」、すなわち武道とは、技術の習得だけではなく生き方を見出していくことだと感じました。

また、打ち込み練習、打ち込み稽古、掛かり練習、掛かり稽古など、スポーツでは「練習」、武道では、「稽古」と言い、おおよそ同じ意味をもっています。

しかし、一つだけ稽古と練習がイコールで結ぶことができない武道ならではの習わしがあります。それは寒稽古や土用稽古といった、条件の悪い時期に集中して練習するものです。私は、これこそが精神の鍛錬ではないかと思ったこともありました。気合いだ！根性だ！ど根性だ！と精神論で競技力は高まらないと分かっている今でも、困難な状況を想定したトレーニングが必要とされています。武道もスポーツも窮地に追い込まれた時に120%以上の力を発揮するためには、日々の練習の中で「苦しさ」や「辛さ」を積み重ねていかなければならないことが継承されてきているからではないでしょうか。

◆4月29日(土) 東京武道館

ピンと張りつめた弓道場、生徒の呼吸でさえも音や風が立たないように息を飲む緊張感。武道は、この極限状態においても自分の力を最大限発揮しなければならない、ましてや矢が的を射抜いてもガッツポーズなどの喜びを表現する感情をも殺さなければならない、常に冷静と沈着の中で、競技に、そして道に挑む生徒の姿がありました。その目は真剣で、日々の練習で鍛えぬかなければ達することはできないであろう、鷹のような鋭い目で28メートル先の的を見ている姿がありました。それはまるで誰もいない森に囲まれた古刹で弓をギュギュッと弾く音だけが聞こえるような静寂さの中でのエネルギーが学びの匂いとなって会場全体に漂っているように感じました。

一方、隣の剣道場からは、「め～ん！」「籠手～！」「胴～！」と気迫のこもった声と竹刀の打ち合う音が鳴り響き、本校剣道部の剣士が勝利を目指して戦っていました。激しい鏝迫り合いでも、決して引けを取らずに相手に向かっていく勇姿からは、生徒の緊張感が伝わります。また、傍らには、顧問と共に心を一つにして応援する仲間があり、どのような環境下であろうともその一瞬を見逃さない洞察力を後押ししていました。一人一人の生徒と顧問は、信頼という絆でしっかりと結ばれており、剣道を通した師からの教えが学びの匂いとなって人の道を切り拓いていると確信しました。惜敗しましたが努力の継続を期待します。

